

東京・多摩の奥津城には倫理運動の創始者・丸山敏雄と、その隣には鳥居武二が眠る。昭和二十年十一月、丸山敏雄は、大分に勤務する鳥居を同志に迎えたいと、大分バス竹田支所に足を運んだといいます。

その竹田の地で長きにわたり夫婦で純粹倫理を学び続けるのが、大分県倫理法人会の県会長歴任者である佐藤博治名誉法人アドバイザーです。氏は長年の無理な生活がたたり、糖尿病に罹患し、四十六歳で右目を失明してしまいました。その際、倫理指導で講師から「心眼を開くチャンスだ」とのアドバイスを受け、氏は、生活の在り方を一変させたのです。

以前は、午前四時が帰宅時間でしたが、それを起床時間に変えました。そして、先祖が積み重ねてきた徳を、自分が五十代までに使い果たしてしまつた。このままでは自分の子孫に申し訳ないという反省の念から、純粹倫理を真摯に学び始めたのです。

氏は六十三歳で大分県倫理法人会の会長に就任。在任中の三年間で七百社以上を増加させて、二十五周年を迎えました。その働きの原動力となつたのが、純粹倫理に救われたという感謝の念と、「自分は鳥居先生ゆかりの竹田の人間」という誇りでした。

しかし、会長職を終えて間もなく、今度は脳梗塞で倒れてしまいました。それでも氏は歩みを止めることなく、その時の心境を次のように歌にしています。

「命あり 立てば歩めと 我に問う 六十六の再出発だ」



## ありのままの自分を 受け入れた時、道は拓かれる

心を曇らせることなくリハビリに励み、施設の職員からは「リハビリ番長・博治さん」と呼ばれ、氏の懸命な姿は、周囲に希望を届ける存在となつていったのです。

ある日、竹田市にある岡城跡を訪れ、石段を一步一步踏みしめながら、体が少しずつ動くようになったことに感じ入るものがあったといいます。その空気に触れながら「自分のわがままが原因で、天から与えられた命、親からいただいた体を粗末にした」と、亡き両親に心から詫言したのです。奇しくも丸山敏雄が竹田の地を訪れてから六十四年後の同日のことでした。

数年後、七十歳を目前にした氏は、娘と共にホノルルマラソンに参加するまでに回復していました。朝五時にスタートし、十二時間二十六分十秒後の夕日が沈み始めた頃、一九〇七〇位で完走を果たしました。

佐藤氏は八十歳を過ぎ金婚式を迎えました。左目が義眼、右目が失明の状態でありながらも、妻と一緒に竹田市倫理法人会のモーニングセミナーに現在も通っています。

古代中国の『論語』の孔子と弟子との問答に、「いまだ生を知らず、いずくんぞ死を知らんや（生についてまだよく分かっていないのに、死のことが、どうしてわかるものか）」とあります。まずは「今」をそのまま受け入れ、精いっぱい生きることが肝要だと、佐藤博治氏の生き様から学んではいかがでしょうか。